

『読むだけで世界地図が頭に入る本』

井田仁康 編著

ダイヤモンド社／2022年5月／1,980円（税込）

ロシアによるウクライナ侵攻が長期化し、その影響が全世界に及んでいる。モノや人の移動がグローバル化した現在、これまで以上に世界の国と国、地域と地域のつながりを意識する機会が多くなるように感じる。そんな時、世界で起きている出来事を「点」ではなく「面」や「線」でとらえやすくしてくれるのが本書である。世界は繋がっているということを変更して実感できるであろう。本書は一見すると各国の紹介が地誌的に列挙されているようにみえるかもしれないが、地図で位置関係や出来事が豊富に表現されており、国どうしの位置関係から今起こっているトピックを理解しやすい。また、これまで「なぜ？」と感じていた世界の疑問について、地図を通して視覚的にも解決してくれる。世界212の国と地域の歴史的な背景や最新のトピックが記されており、地理好きでなくともコロナ禍の今、本書をパラパラとめくるだけでも旅行気分を与えてくれ、時間を忘れて読み進んでしまうであろう。

『幕末社会』

須田努

岩波新書／2022年1月／1,034円（税込）

いま私たちが生きている時代は、どんな時代だろうか、時々考える。そういう時、幕末という時期の考察ほど適したものはないのではないかと。それまでの江戸時代という、全く違った社会から、いま私たちが生きている、いわゆる近代化された社会システムに変わろうとした時期だ。江戸時代とはどんな時代で、明治維新とはどんな変革で、どんな社会が作られ、さらに言えば戦前と戦後とでどう変わっていくのか。「変革」「変わった」と書いたが、「変わっていない」部分もあるのではないかと。

本書は、幕末を、多くの人びとが「未来は思い描けなくても、“徳川さんの世は終わる”との実感は持っていた時代」ととらえる。おそらく江戸時代の初めに、そう思っていた人はほとんどいなかったのではないだろうか。それが、どう変化したのか。当時の庶民の意識に迫るといって難題に挑み、かなり真相に迫っているのではないかと、感じた。多少荒っぽい箇所があるとも感じたが、一読をお薦めしたい。

『人はどう死ぬのか』

久坂部羊

講談社現代新書／2022年3月／990円（税込）

著者は、小説家としても死をテーマに執筆活動が続けている現役の在宅診療医。メディア等を通して盛んに喧伝される「幸せな死」に対して、現場で数多くの現実の死を看取った経験から、人間の最期の数々の不都合な事実にも冷静に焦点を当てている。言うまでもなく全ての人にとって「死が一発勝負で、練習もやり直しもできない」ということが自明である以上、老若男女を問わず一人一人がやがて迎える自身の死から決して目を逸らさずに、真正面から向き合うことの重要性を痛感させられる。

『日本人の宿題』

半藤一利ほか

NHK出版新書／2022年1月／968円（税込）

一貫して反戦平和を訴え続け、編集者・作家として膨大な数の作品を残して昨年90歳で亡くなった自称「歴史探偵」が、ラジオ番組で語った深みのある言葉の数々を再構成した一冊。「昭和史を知ること、わたしたち日本人は何者かを知ること」であると、残された我々に大きな宿題を遺している。

『私たちが声を上げるとき アメリカを変えた10の問い』

和泉真澄らほか

集英社新書／2022年6月／1,100円（税込）

書名からは女性10人の経験を主題としていることが伝わりにくいのだが、そこは執筆者たちのこだわりで「私たち」としたという。それがかえって、この本に目が止まる人が減ってしまうのではないかと危惧し、今回紹介した。本書で取り上げられているエピソードは、現在にも生じている差別を理解するのに適切なものが多く、歴史総合の授業の導入に用いて、問いを生徒に出させるのにちょうどよい。

『学問としての教育学』

苫野一徳

日本評論社／2022年2月／1,870円（税込）

本書は哲学の本としても読めるし、教師が自分自身の実践を教育の原理に照らして有効と言えるか悩んでいる時の、導きの糸にもなりうる。著者は自由の相互承認の感度を育むのが公教育の役割だと以前から主張している。実践や分析が教育者の欲望に相關的であること自覚し、科学性を担保した記述をして、広く議論すべきと説く。